

香川・高松城跡たかまつじょう  
(松平大膳家上屋敷跡)

- 1 所在地 香川県高松市丸の内
- 2 調査期間 二〇〇二年(平14) 四月～九月
- 3 発掘機関 高松市教育委員会
- 4 調査担当者 小川 賢
- 5 遺跡の種類 城郭跡(武家屋敷)
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(高松)

調査地点は高松城内、武家屋敷の建ち並ぶ外曲輪に位置する。調査の結果、南に隣接する松平大膳家中屋敷跡の調査成果や当該期の絵地図に見られる通り、道に面した屋敷境や門などの遺構を確認し、同家上屋敷の一郭にあたる事が明らかとなった。

松平大膳家は、初代高松藩主頼重の子、頼芳(一六六七～一七〇六年)の分家に始まり、以後、藩主を輩出

するなど、連枝として明治時代に至るまでの間、中堀の大手に面する当該地に屋敷を構えていた。

木簡などの墨書のある遺物は、大型の落ち込み状遺構(SX三〇〇四・三〇〇五・三〇〇六)から、有機物や炭化物を含む砂質土に混じり出土した。これらの落ち込み状遺構は、大半が調査範囲外に広がる上、攪乱坑で分断されていたため性格は不明だが、他の遺構との前後関係や共存する陶磁器から、一七世紀第Ⅲ四半期に属するとみられる。これは頼重が入封した寛永一九年(一六四二)以降で、大膳家が成立する前の時期に相当する。この時期の当該地は、確認した遺構や該当する絵図をみる限り、後の大膳家の敷地と大きな違いはないが、その所有者は明確ではなかった。家格や文献の表現から彦坂織部郎と推定されていたが、今回報告する木簡にその与力であった人物とみられる名が認められ、この推定の裏付けとなった。彦坂織部は頼重の常陸国下館以来の家臣で、知行高六千石の大老であったが、その嫡男、織部玄年に継嗣がなく、貞享四年(一六八七)に家が絶えた。

なお、同じ落ち込み状遺構からは、木簡のほかに、片面に草花を描く板材や、底部外面に「大」の文字に読める縁取り線の墨書、内面に草花文様を描く回転糸切り痕をとどめる土師器皿も出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「〔与左衛門様カ〕富岡〔野カ〕柴〔様カ〕上原正兵衛」

・「〔与左衛門様カ〕上原正兵衛」

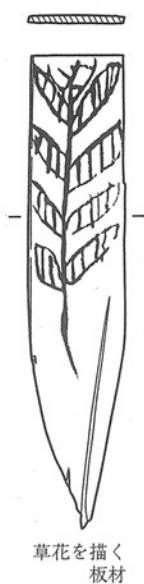
235×24×5 032

表面に併記した人物宛に砂糖を送った荷札と考えられる。『高松藩士由緒録』によると、富岡姓の人物は富岡与左衛門しか知られておらず、宛名の人物は与左衛門を指す可能性が高い。『由緒録』によれば、初代与左衛門は万治年間（一六五八～六二）に彦坂織部の与力を勤め、その子与左衛門も元禄元年（一六八八）まで在職したとされ、遺構の年代や大膳家への移行時期と矛盾しない。さらに、「上天白砂糖五拾斤」という荷から、織部亥年が藩主頼重の姪、多可を妻とした婚礼（寛文六年（一六六六））との関連が推定される。なお、木簡の釈読にあたっては、香川県歴史博物館の御厨義道氏のご教示を得た。

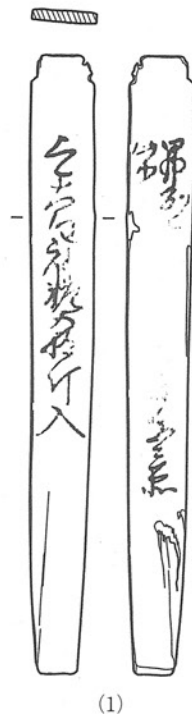
9 関連文献

高松市教育委員会・四電ビジネス㈱「高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）」（二〇〇四年）

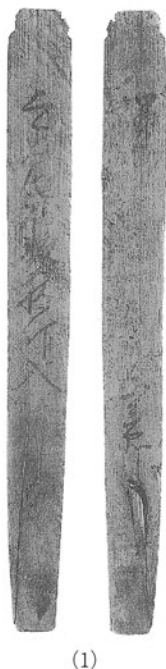
（小川 賢）



草花を描く  
板材



(1)



(1)



「大」墨書土器